

令和5年度

「防災ラジオドラマ」シナリオコンテスト

タイトル

「笠を携えて」

【登場人物一覧】

- ・ 二軒屋ポン介
- ・ 二軒屋ポン蔵
- ・ みっちゃん（名前のみ）
- ・ さち（名前のみ）

## 【概要】

徳島市内で、人間に化けてまっとうに暮らしていた阿波狸のポン介。人間のみっちゃんにプロポーズをしようと眉山を下見に来たが、おじさんのポン蔵に「絶対に失敗する」と言われてしまう。狸界の掟の一つである、笠を携えていないことが原因だった。

次の日、ポン介はポン蔵と笠を携えるため街へ出る。最初の行先はホームセンターで、ポン蔵が揃えたのは防災グッズ。次の行先はポン介の通勤路で、防災マップの確認をした。ポン介は戸惑いつつも、気づくと頭には、新しい笠が備わっていた。

そして大津波がやってきた。備えていた防災グッズは各所で役立ち、ポン介は率先避難者としてまちの人を守る。共に防災について事前確認をしていたみっちゃんは無事だった。

それから半年後、眉山でポン蔵は昭和南海地震で大事なひとを失ったことを話す。ポン介は改めて笠を大事にしていこうと強く思う。

SE 風が吹いている

SE 遠くでクマゼミが鳴いている

ポン蔵 「ポン介、お前、こんな眉山の頂上まで下見にまで来とるけどな、絶対的に失敗するで、プロポーズ」

ポン介 「絶対って、なんでえ、ポン蔵おじさん。こおんなきらきらした素敵な夜景見せられたらさ、みっちゃんも目がハートやわ、間違いない。人間も、日本の夜景百選に選ぶくらいや」

ポン介 N 「俺は、眉山に住む阿波狸。日中は人間に化けて、徳島市内でまっとうな公務員をして、まっとうな生活をしていたら、狸みたいに目のくりつとした、それはかわいらしい素敵な人間に出会い、プロポーズまで漕ぎつけようとしている、なのに、」

ポン介 「なんで、失敗すると思うんや」

ポン蔵 「お前、阿波狸のくせに、笠を被つたらん」

ポン介「あゝまた出た、その話。今日のため  
き新聞朝刊にも載った。近年の  
化け狸は、笠を被つたらんのが増え  
とるって。言うてるやんか、いつの  
まにかなくしたんやって」

ポン介M「するとポン蔵おじさんは、立派な  
笠から、いつもくりっとしていた目  
を鋭くのぞかせて、言った」

ポン蔵「ポン介、阿波狸七相縁起の一つめ、  
言うてみ」

ポン介M「またこれだ。阿波狸七相縁起、そ  
れは俺たち阿波狸界の掟のようなも  
の。近年は狸版働き方改革とともに  
規則も緩くなってきたが、特に年配  
の、この百何歳かもわからないおじ  
さんのような狸から逐一復唱を促さ  
れるため、からだに染みついてしま  
っている」

ポン介「ええ？ ひとつめはたしか…思わざ  
る悪事・災難避けるため用心、常に

身をまもる、笠：」

ポン蔵「ほうや。思いもかけない災難を避け、準備して身を守る。その笠を被りよらん狸なんぞ、半人前や。その子にもばれるわ」

ポン介「でもなおじさん、みっちゃんの前では、人間の姿なんよ。何より、笠が無くても生きていけよるもん」

ポン蔵「ポン介、お前、自身のためなんや」

ポン介「俺、自身の？」

ポン蔵「そして、みっちゃん、言うたか」

ポン介「うん、みっちゃん。みっちゃん：今は来月に向けて駅前で阿波踊りの練習しよる。その踊りも可憐でなあ、」

ポン蔵「何より、みっちゃんのためなんや。」

大事な、(声が震えている)」

ポン介「え？：おじさん」

ポン蔵「大事なひとなんやろ。：お前には、また繰り返してほしくないんや」

ポン介「またって？」

SE 防災無線

ポン蔵「ああ、防災無線。もう8時か」

ポン介「あ、おじさん、それ、ええ時計やな。

懐中時計？ 年季はいりよる」

ポン蔵「ああ、大事な、時計なんや」

ポン介M「次の日から俺は、おじさんの話を

もとに、笠を備えるための行動を起

こすことにした。俺はなにより、プ

ロポーズを、成功させるために」

SE ホームセンターの雑踏

ポン介「集合、ホームセンターで。なんで？」

ポン蔵「おいポン介、しっぽ出とるで」

ポン介「あ、やば。ここで笠が売りよるん？」

ポン蔵「ええから。ひとつひとつな、備えて

いくんよ」

ポン介「おじさん、この棚にあるん？ 笠」

ポン蔵「：まずは、これやな」

ポン介「え、それ懐中電灯や。笠ちやうで」

ポン蔵「あと携帯ラジオ、ああ、予備の電池

も忘れたらいかん」

ポン介「ああ、かご使い、おじさん。にしても笠、関係ないやん」

ポン蔵「黙り。それから非常食と水な、最低でも3日分は欲しいわな。ほれからマスクと消毒液。それから：」

SE がさがさと詰める音

ポン介M「おじさんは俺の質問には答ええないまま、わき目も降らず商品をかごに入れていった。かごがいつぱいになったころ、俺はようやくおじさんがここに何をしに来たかを理解した」

ポン介「これ：防災グッズばかりや」

ポン蔵「ほうや、笠は笠でも、いのちを守る笠。いつまた来るかもわからん、地震と津波から」

ポン介「(ちよっと笑って)俺の欲しい笠とちやうやん」

ポン蔵「(怒った声)ポン介！冗談やないねんで！大事な、だいつじな笠や！」

ポン介「あ、ご、ごめん。そんな大層なもの



と知らんかったんや」

ポン蔵「(吐息)：大事なことなんや。ほうや、もうひとつある。お前が会社行くと  
き通る道。連れてってくれんか」

ポン介「え、通勤路？ええけど：今度はなん  
で？」

### SE 信号の音

ポン介「ここ渡ってまっすぐ行ったら会社や」

ポン蔵「ポン介、スマホ貸してみ。ここらの  
防災マップ、出せるか？」

ポン介「ん？ぼ・う・さ・い、マップ：これ  
か。わ、俺の職場らへん、オレンジ  
や。これ津波がここまで来るってこ  
とか？2mって：ほんまか」

ポン蔵「ほなけんど、これは前起こった被害  
をもとにした、想定や。自然が、津  
波が、その想定を超えてくることは  
ままあることや。それぞれの状況で  
即座に判断して安全を確保するんが  
大事なんや」

ポン介「あ、中央公園の城山は緊急避難場所  
になっとるんやな、ほかにも、津波  
避難ビルっていうのがあるんや」

ポン蔵「ほうや。一回、そこまでの避難経路  
を歩いてみるんや。そんだけで、イ  
メージがつくやろ」

SE 阿波踊りの練習の音

ポン介「やっとなるわ、練習。あ、みっちゃん  
の連やないかな、あそこの」

ポン蔵「ポン介。みっちゃんとも、話すんや。  
いざというときのために、どう行動  
するのか、どういのちを守るのか」

ポン介「わかった。今何時や：あれ、おじさ  
ん、その懐中時計、止まっとる？い  
ま、4時やないで」

ポン蔵「あ、ほうやな：お、ポン介。」

ポン介「ん？」

ポン蔵「におうとるぞ、新しい笠」

ポン介「あつ、ほんとだ。へへ。なんか、自  
信、ついたわ。ありがと、おじさん」

SE 阿波踊りの音頭が小さくなる

ポン介M 「そして、その数か月後のことだった。ほんとうに、その日はやってきた。なんの、前触れもなく」

SE テレビの放送 「緊急地震速報です。強い揺れに、警戒してください」

SE 津波の音 「ゴオオ」

SE 防災無線 「津波が発生しています。高台へ、避難してください」

ポン介M 「今まで経験したことのない大きな揺れのあと、大津波がやってきた。頭の上に被さってくるような、轟音をあげて。」

ポン介 「逃げる、逃げるんや！」

ポン介M 「波は土煙を上げて、黒いどろどろした生きもののように、迫ってきた」

SE 災害情報を伝えるラジオの声

ポン介M 「防災無線は、停電のため聞こえなくなつた場所もあつた。でも、そんなとき、手元にあつた携帯ラジオが、

情報を伝え続けてくれた」

ポン介「あっちは土砂崩れで通行止めや！

高台まではよ、みんなで逃げよ！」

ポン介M「避難経路の事前確認は、いざ避難するときの迷いを消してくれた。俺は率先避難者として、周りに声をかけながら高台に避難した」

SE 電話の呼び出し音

ポン介「電話、繋がらんな…でも、大丈夫や、みっちゃんもきつと避難しとる」

ポン介M「そして、あの日、みっちゃんと話したこと、津波が来たら、どこへ逃げるか、連絡手段はどうするか、それは、『まず自分の身を守る』という、その判断の手助けになった」

SE 津波の音「ゴオオ…」

ポン介M「最初3mほどの予想だった津波は、時間がたつにつれて、どんどん高くなっていった。波は、家を、街を、ここに暮らす人たちの生活を、はぎ

とっついていった」

SE 津波の音「ゴオオ…」

SE 津波の音静かになり、風が吹いている

ポン蔵「覚えとるか。ここで、おんなじくらい  
いの時間に夜のまちを見下ろしてた」

ポン介「もう半年前か。ああ、信じられなく  
らい、静かで、真っ暗や」

ポン蔵「みっちゃんは、元気か」

ポン介「一緒に仮設住宅で暮らしとる」

ポン蔵「ほうか」

ポン介「あのととき、笠を持つとらんかったら、  
どうなっとなったかわからん」

ポン蔵「俺も、あのととき、笠を持つとらんか  
った。自分は大丈夫やと思っつて」

ポン介「え、あのととき？」

ポン蔵「…今から、七十七年前のことや。」

SE リン、鈴の音

ポン蔵「徳島の海南町、今の海陽町やな、そ  
こで俺は人間に化けて、お前とおん  
なじや、まっとうに暮らしとった。

そこにな、大津波が来た。昭和南海地震や。そのときにな、俺、さちを亡くした」

ポン介「えっ、さちって、」

ポン蔵「大事な、大事なひとやった。この懐中時計は、俺が、プロポーズのときさちにプレゼントしようとしたもんで。瓦礫の下から、なんとか見つけ出して、冷たい泥をはらって、」

ポン介「ほう、やったんや」

ポン蔵「今でも後悔しとる。あのとき、地震から津波が来るまで三十分もあった。なんであのととき俺は：今でも繰り返し繰り返し、自分を責めとる」

ポン介「その、4時っていうのは：」

ポン蔵「海南町に津波が来た、午前4時や」

SE 防災無線が鳴る

ポン介「ああ、防災無線。電気、もう元通りやな」

ポン蔵「：電気が通り始めても、どんだけま

ちの復興が進んでも、大切なひとを  
喪った者にとって、震災に、終わり  
はない」

ポン介「だから、俺に、笠を持たせて」

ポン蔵「ほうや。繰り返さんように。こんな  
につらくて、苦しい思いを」

ポン介M「おじさんはそこで、懐中時計をな  
でた」

ポン介「…この笠、ずっとずっと、大事にす  
るわ。繰り返さんように」

SE 阿波踊りの音が遠くから聞こえる

ポン介「風、つようになってきたな」

ポン蔵「お、ポン介、見てみ。あの明かり、  
高張り提灯や」

ポン介「ほんまや、踊りの練習やろか」

ポン介M「俺は、海の方から吹く風に飛ばさ  
れないよう、この大事な笠をしっか  
りと、いつまでも、強く握っていた」

SE 風が吹いている